

## 論文

中期留学第 15 期生の選抜時と帰国後の英語力の伸長分析<sup>1)</sup>

——中期留学（英語圏）経験者の客観的英語力とその弱点——

中期留学（英語圏）委員会委員長 笠 原 正 秀

## はじめに

本稿の目的は、本学部留学プログラムとして実施している中期留学（英語圏）第 15 期生の選考時から帰国後に見られる英語力の変化を分析するとともに、そこから見える中期留学（英語圏）経験者が獲得した英語力と、より強化すべき技能は何かを検討することである。詳細は以下に譲るが、本稿が分析の対象としている第 15 期生の英語力を測定する基準に用いているのは、2016 年度中期留学に応募した学生たちが一律に 2015 年 12 月に受験した TOEIC IP<sup>2)</sup> と、留学期間が 6-7 か月であった学生の場合は帰国後の 2017 年 5 月に、また留学期間が 1 年であった学生の場合は帰国後の 2017 年 10 月に受験した TOEIC IP の結果である。結果の項目で用いている観点および分析のしかたは、笠原（2008, 2011, 2015, 2017）と同様とした。一定の視座から定点的に中期留学経験者の英語力<sup>3)</sup> の分析を重ねていくことにより、中期留学（英語圏）経験者全体をととして、その英語力の変化に一般化できる法則性やルール性が発見できるのではないかと考えるためである。

## 方 法

## 対象者

本研究の分析対象となったのは、2016 年度中期留学で英語圏<sup>4)</sup> に留学した学生 30 名のうち 29 名である。2016 年度各協定校に留学した学生の人数の内訳は以下のとおりである：ヴィクトリア大学 6 名；エディンバラ大学 2 名；デイトン大学 6 名；ウェリントン・ヴィクトリア大学 5 名；タスマニア大学 6 名；サンディエゴ州立大学 5 名。30 名のうち 28 名は 2 年生、2 名は 3 年生である。しかし、サンディエゴ州立大学に留学した学生のうち、1 名が 2017 年 4 月以降、本プログラムを離れ、休学し、個人留学の形でアメリカに残ったため、帰国後の TOEIC IP は未受験となっている。そのため、帰国後のデータからは当該の学生 1 名が外れ、29 名を対象に分析・検討を行っている。

また、1 年留学のシステムを擁しているウェリントン・ヴィクトリア大学とデイトン大学については、ウェリントン・ヴィクトリア大学の場合は、留学期間は 1 年間が前提となっているため、3 年生の前期までの期間を現地で過ごしてくることになる。2016 年度生の場合、5 名中 1 名が学部への入学が許可され、後半の半年間、学部の正規の授業を履修することを許されている。他の 4 名は語学学校での滞在となった。また、デイトン大学の場合、2 名が

学部に入ることができ、後半の半年間、学部の正規の授業を履修することを許されている。他の4名は7か月間の英語専修プログラム（Intensive English Program：IEP、以下、IEPと記す）を履修した後、帰国の途についている。第15期生30名中、上記の7名が1年間の留学を経たのち、日本に帰国している。

### 英語力の測定に使用するテスト：TOEIC IP

本研究では、TOEIC IPを選抜時の英語力の測定および帰国後の英語力の伸長を診断するのに用いている。TOEIC IPが選抜時および帰国後の英語力の測定や診断に用いられるようになったのは、2006年度、第5期生の帰国後の英語力の伸長を測定・診断する時からである。第1期生から第5期生までは、本学の交換留学プログラム同様、選抜時のみにTOEFL ITPを用い、帰国後の英語力の検証は行ってこなかった。

TOEFL ITPからTOEIC IPに移行した主な理由として、TOEICの社会的認知度の高さがある。就職活動などでTOEIC IPのスコアを履歴書等に正式なスコアとして記入できることもあり、帰国後、学生たちにとり、さまざまな場面で使えるテストであるため、2007年度、第6期生の時からTOEIC IPに完全移行した。

TOEICの受験者数は、一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会（2017年6月）によれば、2016年度、公開テストに96,193人、IPテストに1,319,218人、総計1,415,411人がTOEICを受験している。うち学生（小学生から大学院、短大、高専、語学学校、専門学校を含む）の受験者数は、公開テストが420,337人、IPテストが641,753人、総計1,062,090人となっている。大学生のみの受験者数をひも解くと、公開テストで313,764人、IPテストで430,372人、総計744,136人となっている。

一方、公益財団法人 日本英語検定協会（<http://www.eiken.or.jp/eiken/merit/situation/>）の「受験の状況」のページの「英検受験の状況」の項目を見ると、2016年度の英検の受験者数は総計3,393,520人であり、うち大学生の受験者数は68,944人となっている。TOEICのそれと比べると圧倒的に少なく、社会的動向として大学生以上の英語力測定の指標は、英検からTOEICに確実に移行していることがわかる。しかし、300万人強の受験者のある英検の主たる受験者層はどこにあるのか、その受験者数の内訳を見てみると、2016年度、2,605,910人の中学生・高校生（高専を含む）が受験しており、英検受験者層の中核は中学生・高校生（高専を含む）であることがわかる。

### 手続き

本留学プログラムに参加した学生の英語力は、留学前と帰国後のTOEIC IPのスコアを比較することにより、その伸びや各年度の学生に見られる英語力の特徴を毎年分析している（e.g., 笠原, 2008, 2011, 2015, 2017）。留学前の英語力として利用しているTOEIC IPは、毎年12月上旬に学部行事の一環として実施しているものを本留学プログラムに参加することを希望する学生の一次選考資料として用いている。ここで実施されるTOEIC IPは、基

本的に1年生の Communicative English の成果を測定するために実施されてきたものである。本留学プログラムは、本来2年次の後期に出発するプログラムとして作られたものであるため、1年次終盤に行われるこの TOEIC IP は、英語力を測る一次選考資料として用いるのにタイミングとしても良かったと言える。

帰国後の英語力を測定する TOEIC IP は、5月と10月に行われるものを利用している。本留学プログラムは、基本的には6-7か月間の語学留学プログラムであるが、サンディエゴ州立大学とデイトン大学に関しては、6-7か月間の語学学校や IEP での英語力の強化により、TOEFL で各大学が定めている所定のスコアをクリアするか、語学学校や IEP での最上級クラスを修了することにより、もう半年間、学部生として学部の授業を履修することができ、最長1年間の留学プログラムとすることが可能な制度を持っている。また、ウェリントン・ヴィクトリア大学の場合は、1年間の留学が基本となっており、学部への入学、もしくは最低限、ファンデーション・コース（大学進学準備科目）の履修ができるところまで英語力を伸ばすことが目標となっている。そのため、5月の TOEIC IP は半年間の留学を終え帰国した学生が受験し、1年留学となった学生は10月に行っている TOEIC IP を帰国後の英語力の測定に利用している。

## 結 果

### 第15期生の TOEIC IP の各項目別平均——選抜時と帰国後——

第15期生の選抜時（2016年12月受験）と帰国後（2017年5月もしくは10月受験）の TOEIC IP の各項目別平均は以下のとおりであった（Table 1., Table 2. 参照）。

Table 1. 選抜時の TOEIC IP の結果（各項目の記述統計量）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
Listening（選抜時）	30	215	450	319.00	50.44
Reading（選抜時）	30	150	330	223.33	42.27
Total（選抜時）	30	390	745	542.33	80.37
有効なケースの数（リストごと）	30				

(N=30)

Table 2. 帰国後の TOEIC IP の結果（各項目の記述統計量）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
Listening（帰国後）	29	310	495	395.86	43.26
Reading（帰国後）	29	215	395	297.24	49.51
Total（帰国後）	29	570	880	693.10	83.63
有効なケースの数（リストごと）	29				

(N=29)

Listening の平均値が 312.17 点（最大値 415 点、最小値 215 点）、Reading は平均値が 220.17 点（最大値 330 点、最小値 150 点）、Total の平均値が 532.33 点（最大値 745 点、最小値 390 点）であった（Table 1. 参照）。

次に、帰国後の TOEIC IP の各項目のスコアを概観してみると、全項目にわたって、選抜時から比べ、大きくスコアを伸ばしていることがわかる（Table 2. 参照）。Listening の平均値が 395.86 点（最大値 495 点、最小値 310 点）、Reading は平均値が 297.24 点（最大値 395 点、最小値 215 点）、Total の平均値が 693.10 点（最大値 880 点、最小値 570 点）であった。

実数値ではスコア的には伸びていることがうかがえる結果であるが、統計的にも学生たちの英語力が伸びていることを確認するため、選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目に対し、 $t$  検定を実施した。結果は以下のとおりである（Table 3. 参照）。

Table 3. 選抜時と帰国後の TOEIC IP の各対応する項目の  $t$  検定

	対応サンプルの差						<i>t</i> 値	自由度	有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	平均値の 差の95% 信頼区間						
			標準誤差	下限	上限				
帰国後 Listening — 選抜時 Listening	81.38	48.97	9.09	62.75	100.01	8.95	28	.00	
帰国後 Reading — 選抜時 Reading	75.17	41.05	7.62	59.56	90.79	9.86	28	.00	
帰国後 Total — 選抜時 Total	156.55	74.51	13.84	128.21	184.89	11.31	28	.00	

Listening、Reading、Total のすべての項目において、統計的にも有意な差のあることが確認された（Listening :  $t = 8.95$ ,  $df = 28$ ,  $p < .001$ ; Reading :  $t = 9.86$ ,  $df = 28$ ,  $p < .001$ ; Total :  $t = 11.31$ ,  $df = 28$ ,  $p < .001$ ）。つまり、第 15 期生の英語力は統計的にも選抜時より伸びていることが明らかとなった。

### 第 15 期生の選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目別平均に見られる相関

第 15 期生の選抜時（2016 年 12 月受験）と帰国後（2017 年 5 月もしくは 10 月受験）の TOEIC IP の各項目間の相関を分析したところ、以下のような結果が得られた（Table 4. 参照）。各項目間で比較的強い相関が示されている<sup>6)</sup>。選抜時と帰国後の呼応する項目間での相関係数の高さも見てとれるが、それ以外の項目間においても  $r > .40$  を超える「比較的強い相関」が示されている。唯一、有意な相関が示されなかった個所は、選抜時の Reading と帰国後の Listening の間であった（ $r = .27$ ,  $p = .151$ ,  $n.s.$ ）。数値的には「弱い相関がある」というレベルではあるが有意ではなかった。

### 留学先別 TOEIC IP の各項目に見られる英語力の変化——選抜時と帰国後——

第 15 期生の選抜時（2016 年 12 月受験）と帰国後（2017 年 5 月もしくは 10 月受験）の

Table 4. 選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目に見られる相関<sup>5)</sup>

		1.	2.	3.	4.	5.	6.
1. 選抜時 Listening	Pearson の相関係数	1	.50**	.89**	.38*	.46*	.47**
	有意確率 (両側)		.005	.000	.041	.012	.010
	度数	30	30	30	29	29	29
2. 選抜時 Reading	Pearson の相関係数		1	.84**	.27	.61**	.50**
	有意確率 (両側)			.000	.151	.000	.005
	度数		30	30	29	29	29
3. 選抜時 Total	Pearson の相関係数			1	.38*	.62**	.56**
	有意確率 (両側)				.041	.000	.001
	度数			30	29	29	29
4. 帰国後 Listening	Pearson の相関係数				1	.62**	.89**
	有意確率 (両側)					.000	.000
	度数				29	29	29
5. 帰国後 Reading	Pearson の相関係数					1	.92**
	有意確率 (両側)						.000
	度数					29	29
6. 帰国後 Total	Pearson の相関係数						1
	有意確率 (両側)						
	度数						29

\*\* . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

\* . 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

TOEIC IP の各項目を各留学先別に分析したところ、以下のような結果が得られた (Table 5. 参照)。

Table 5. 選抜時の留学先別 TOEIC IP の項目別平均値<sup>7)</sup>

留学先		選抜時 Listening	選抜時 Reading	選抜時 Total
A 大学	平均値	303.33	224.17	527.50
	標準偏差	61.78	70.32	112.19
B 大学	平均値	332.50	220.00	552.50
	標準偏差	31.82	56.57	88.39
C 大学	平均値	317.50	228.33	545.83
	標準偏差	12.94	31.25	36.11
D 大学	平均値	311.00	207.00	518.00
	標準偏差	64.85	51.31	108.66
E 大学	平均値	320.00	230.83	550.83
	標準偏差	32.71	22.90	39.42
F 大学	平均値	341.00	225.00	566.00
	標準偏差	80.73	31.62	108.71
合計	平均値	319.00	223.33	542.33
	度数	30	30	30
	標準偏差	50.44	42.27	80.37

選抜段階において、Listening スコアの平均値は 319.00 点（最大値 341 点、最小値 303 点）となっており、やや F 大学の平均が他と比べて高いように見える。Reading に関しては、平均値が 223.33 点（最大値 230.83 点、最小値 207.00 点）となっており、D 大学が他と比較して若干点数的に低いように見えるが、ほぼヨコ並びと言えそうである。Total に関しては、平均値が 542.33 点（最大値 566.00 点、最小値 527.50 点）となっている。A 大学と D 大学が他と比べて若干点数的に低いように見えるが、ほぼ横並びである。

実数値に見られる差異が統計的にも確認できるか、それらの数値に対し分散分析 (ANOVA) を実施した。その結果は以下のとおりである (Table 6. 参照)。

Table 6. 選抜時における留学先校別 TOEIC IP の項目別平均の分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
選抜時 Listening * 留学先	グループ間(結合)	4596.67	5	919.33	.32	.897
	グループ内	69173.33	24	2882.22		
	合計	73770.00	29			
選抜時 Reading * 留学先	グループ間(結合)	1861.67	5	372.33	.18	.968
	グループ内	49955.00	24	2081.46		
	合計	51816.67	29			
選抜時 Total * 留学先	グループ間(結合)	7795.00	5	1559.00	.21	.956
	グループ内	179541.67	24	7480.90		
	合計	187336.67	29			

Table 5. では、各留学先間に若干の差があるように見えたが、統計的には Listening、Reading、Total のすべてにおいて、各留学先間に英語力の差はないことが示された、Listening :  $F(5, 24) = .32, p = .897, n.s., \eta^2 = .062$ ; Reading :  $F(5, 24) = 18, p = .968, n.s., \eta^2 = .036$ ; Total :  $F(5, 24) = .21, p = .956, n.s., \eta^2 = .042$ 。つまり、選抜時の段階において、各留学先グループ間に英語力の差はなく、横並びであったと言える結果が示された。

次に、帰国後の TOEIC IP の各項目のスコアを留学先別に概観してみると、以下のような結果が得られた (Table 7. 参照)。帰国後の全体の標準偏差の値が、選抜時よりも小さな値になっていることから、留学先グループ間の差はますますなくなっていると考えられる。

その点を明らかにするために、帰国後の各留学先グループの TOEIC IP の各項目別スコアに分散分析 (ANOVA) を実施した。その結果、以下のような数値が算出された (Table 8. 参照)。

Listening、Reading、Total のすべてにおいて、各留学先グループ間に英語力の差はないことが統計的にも示された、Listening :  $F(5, 23) = .62, p = .689, n.s., \eta^2 = .118$ ; Reading :  $F(5, 23) = .53, p = .755, n.s., \eta^2 = .102$ ; Total :  $F(5, 23) = .36, p = .871, n.s., \eta^2 = .072$ 。つまり、どの留学先に行ったグループも、同程度のレベル<sup>9)</sup>にまで英語力を身につけて帰国しているということである。

Table 7. 帰国後の留学先別 TOEIC IP の項目別平均値<sup>8)</sup>

留学先		帰国後 Listening	帰国後 Reading	帰国後 Total
A 大学	平均値	389.17	287.50	676.67
	標準偏差	36.80	64.63	91.47
B 大学	平均値	417.50	290.00	707.50
	標準偏差	3.54	28.28	31.82
C 大学	平均値	380.83	284.17	665.00
	標準偏差	48.83	39.68	76.16
D 大学	平均値	411.00	320.00	731.00
	標準偏差	55.84	46.90	96.72
E 大学	平均値	384.17	314.17	698.33
	標準偏差	28.88	32.77	58.71
F 大学	平均値	416.25	281.25	697.50
	標準偏差	60.19	77.18	135.55
合計	平均値	395.86	297.24	693.10
	度数	29	29	29
	標準偏差	43.26	49.51	83.63

Table 8. 帰国後の留学先校別 TOEIC IP の項目別平均の分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
選抜時 Listening * 留学先	グループ間(結合)	6189.70	5	1237.94	.62	.689
	グループ内	46213.75	23	2009.29		
	合計	52403.45	28			
選抜時 Reading * 留学先	グループ間(結合)	7031.39	5	1406.28	.53	.755
	グループ内	61597.92	23	2678.17		
	合計	68629.31	28			
選抜時 Total * 留学先	グループ間(結合)	14196.52	5	2839.31	.36	.871
	グループ内	181624.17	23	7896.70		
	合計	195820.69	28			

### 留学先別 TOEIC IP の各項目の伸び——選抜時と帰国後——

留学先により英語力の伸びに差が生じているのかを検証するために、選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目にどのくらいの伸びが見られるかを集計してみた。その結果は以下のとおりであった (Table 9. 参照)。実数値では、Listening に関しては E 大学の伸びが小さいように見える。また、Reading に関しては D 大学の伸びが大きいように見える。Total に関しては、D 大学と C 大学の間に大きな差があるように見える。

実数値では上述のような差異がうかがえるが、それらの数値に統計的にも差異が存在するかを確認するため、分散分析 (ANOVA) を実施した。その結果は以下のとおりであった (Table 10. 参照)。

Table 9. 選抜時と帰国後の TOEIC IP に見られる各項目の伸び<sup>10)</sup>

留学先		選抜時と帰国後の差 Listening	選抜時と帰国後の差 Reading	選抜時と帰国後の差 Total
A 大学	平均値	85.83	63.33	149.17
	標準偏差	32.774	47.924	50.341
B 大学	平均値	85.00	70.00	155.00
	標準偏差	28.284	28.284	56.569
C 大学	平均値	63.33	55.83	119.17
	標準偏差	42.151	36.663	74.055
D 大学	平均値	100.00	113.00	213.00
	標準偏差	80.700	23.611	91.008
E 大学	平均値	64.17	83.33	147.50
	標準偏差	57.656	31.885	88.473
F 大学	平均値	102.50	65.00	167.50
	標準偏差	25.981	57.009	68.981
合計	平均値	81.38	75.17	156.55
	度数	29	29	29
	標準偏差	48.970	41.046	74.512

Table 10. 選抜時と帰国後の留学先別 TOEIC IP の各項目の伸び平均の分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
選抜時と帰国後の差 Listening * 留学先	グループ間(結合)	7394.83	5	1478.97	.57	.723
	グループ内	59750.00	23	2597.83		
	合計	67144.83	28			
選抜時と帰国後の差 Reading * 留学先	グループ間(結合)	11106.64	5	2221.33	1.42	.256
	グループ内	36067.50	23	1568.15		
	合計	47174.14	28			
選抜時と帰国後の差 Total * 留学先	グループ間(結合)	25621.01	5	5124.20	.91	.493
	グループ内	129834.17	23	5644.96		
	合計	155455.17	28			

Listening、Reading、Total のすべてにおいて、留学先間に見られる TOEIC IP の各項目のスコアの伸びに有意な差はないということが示された、Listening :  $F(5, 23) = .57$ ,  $p = .723$ ,  $n.s.$ ,  $\eta^2 = .110$ ; Reading :  $F(5, 23) = 1.42$ ,  $p = .755$ ,  $n.s.$ ,  $\eta^2 = .235$ ; Total :  $F(5, 23) = .91$ ,  $p = .493$ ,  $n.s.$ ,  $\eta^2 = .493$ 。つまり、どの留学先に行っても同程度の英語力の伸びが期待できるということが確認された。

## 考 察

### 第 15 期生の客観的英語力——選抜時と帰国後の比較検討から見えるもの——

第 15 期生の英語力を客観的な視点から検討する。その際、論点とするのは選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目で示された平均スコアとする。



まず、第15期生の選抜時と帰国後の TOEIC IP に見られる各項目の平均スコアであるが、選抜時の TOEIC IP の Total 平均 542.33 点 (Listening 319.00 点, Reading 223.33 点) というスコアは、一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2017 年 6 月) によれば、2016 年度各民間企業、官公庁、非営利団体などで実施された IP テストの平均スコアで、もっとも近いスコアを示している業種は「サービス業」の Total 543 点 (Listening 303 点, Reading 240 点, 受験者数 108,762 名) である。また、同資料に基づく、平均が 540 点台の業種として「薬品」(Listening 296 点, Reading 250 点, Total 546 点, 受験者数 5,602 名) があげられる。

また、2016 年度の新入社員のための TOEIC IP 受験データと比較すると、「金融」546 点 (受験者数 2,671 名)、「不動産」545 点 (受験者数 126 名)、「薬品」541 点 (521 名)、「政府機関」540 点 (527 名) といった業種が第15期生の選抜時の TOEIC IP に近い Total スコアとなっている (一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会, 2017 年 7 月)。つまり、第15期生は、こうした業種で働いている社会人と同程度の英語力を持って本留学プログラムの下、半年間から1年間、英語圏という特別な環境の中に身をおき、英語を磨いてきたということである。

次に、帰国後の TOEIC IP の各項目スコア平均 (Listening 395.86 点, Reading 297.24 点, Total 693.10 点) は、もっとも近い業種として「海外」の Total 683 点 (Listening 374 点, Reading 309 点, 受験者数 4,387 名) があげられる。しかし、第15期生とは10点の差のあることが見てとれる (一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会, 2017 年 6 月)。また同資料によれば、これ以上高い TOEIC IP のスコアを示している業種は他には見当たらない。このことから、帰国した学生たちの英語力は多くの業種・業界で働くのに十分なレベルにあると見ることができる。

また、新入社員だけのデータで見てみると、Total スコアの平均で 600 点を超えているのは3業種しか見当たらない (cf. 公共団体 737 点, 受験者数 95 名; 鉱業 665 点, 受験者数 81 名; マスメディア 623 点, 受験者数 252 名, 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会, 2017 年 7 月)。つまり、第15期生の帰国後の英語力は社会人として、どの業種・業界でも十分通用する英語力であると見ることができる。

実数値だけの比較ではあるが、第15期生の英語力は、2016 年度に TOEIC IP を受験した社会人データと比較して見ても、どの業種・業界に就いても十分なレベルの英語力を身につけていると言える。しかし、この英語力を実際に社会人として企業に勤め、ビジネスの現場で活用できるようになるまで、いかに維持できるか、そのカギは自助努力にかかっており、学生たちひとり一人に求められるところである。

また、選抜時と帰国後の TOEIC IP のスコアの変化という点においても、*t* 検定を実施した結果、有意な差が確認されており、6-7 か月間もしくは1年間の留学をとおして、英語力が統計的にも伸びていることが証明されている。つまり、本プログラムの主たる目的である「英語力の増強」はきちんと果たされていると言える。これをステップに交換留学に応募

したり、英語で卒業論文を執筆したり、あるいは就職活動への導入になるようであれば、本留学プログラムは学部カリキュラムの一環として、その役割を十分果たしていると言えよう。

#### 第 15 期生の英語力の弱点——選抜時と帰国後の TOEIC IP の項目間の相関から——

選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目別平均スコアの項目間の相関と、各項目スコアの伸びから見える、第 15 期生の英語力の弱点について検討してみたい。

選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目間に見られる相関係数で、最も相関が強く示されているものは、帰国後の Listening に対して選抜時の Listening となっている (Table 4. 参照,  $r = .38, p = .041$ )。比較的高い有意な正の相関が示されている。また、選抜時の Total スコアとの間にも同程度の有意な正の相関が確認されている (Table 4. 参照,  $r = .38, p = .041$ )。つまり、選抜時に Listening のスコアが高かった学生は、帰国後の TOEIC IP においても Listening のスコアが高い傾向があり、帰国後の TOEIC IP で Listening スコアの高かった学生は、選抜時の TOEIC IP の Total スコアが高い傾向にあることを示している。しかし、逆もまた真なりである。選抜時に listening のスコアが低かった学生は、帰国後の TOEIC IP でも Listening のスコアが低い傾向があり、帰国後の TOEIC IP で Listening スコアの低かった学生は、選抜時の TOEIC IP の Total スコアも低い傾向にあることを示している。

次に、帰国後の Reading と強い相関が示されているのは、選抜時の Total スコアである (Table 4. 参照,  $r = .62, p = .000$ )。有意なかなり強い正の相関関係のあることが示されている。つまり、帰国後の Reading で高いスコアを収めている学生は、選抜時の TOEIC IP の Total スコアで高いスコアを収めている学生である傾向が強いことを示している。しかし、逆もまた真なりである。帰国後の Reading で低いスコアの学生は、選抜時の Total スコアが低い傾向にあるということでもある。つまり、Reading の力はある程度の英語力の上に構築されていく技能であるということができる。また、Reading に関しては、選抜時と帰国後に非常に強い有意な正の相関が示されていることから、留学前の段階で Reading 力のある学生は、帰国後においても Reading の力を大きく伸ばしているのである (Table 4. 参照,  $r = .61, p = .000$ )。そして、選抜時の Reading のスコアと選抜時の Total スコアとの相関を見ても、非常に強い有意な正の相関が示されている (Table 4. 参照,  $r = .84, p = .000$ )。こうした相関関係を整理してみると、留学を経験した学生のみならず、本学部の学生の TOEIC を伸ばす上で弱点となっているのが Reading の力であると言える。また同時に、学生たちが TOEIC のスコアを伸ばすためには、Reading のセクションでいかにスコアを伸ばせるかが、今後、本学部の学生の TOEIC のスコアを伸ばすカギと言える。

帰国後の Total スコアと強い相関が示されているのは、選抜時の Total スコアである (Table 4. 参照,  $r = .56, p = .001$ )。比較的に強い有意な正の相関が示されている。つまり、選抜時に TOEIC IP の Total スコアで高いスコアを収めている学生は、帰国後の TOEIC IP の Total スコアでも高いスコアを収める傾向がかなり強いということである。当然、逆もまた真なりである。選抜時に TOEIC IP の Total スコアで低いスコアの学生は、帰国後の TOEIC IP

の Total スコアでも低いスコアである傾向がかなり強いということである。このことから、留学前の段階での英語力が、留学という特別な環境とプロセスの中で英語力を獲得していく際、英語がどれだけ伸びるか、英語をどれだけ伸ばせるか、その重要なカギを握っていると言えよう。

#### 本留学プログラムから獲得できる英語力としての TOEIC スコアの上限の可能性——選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目スコアの伸長結果から——

第 15 期生の留学先別 TOEIC IP の各項目スコアの伸長結果から、留学期間が 6-7 か月から 1 年の本留学プログラムをとおして獲得できる、英語力としての TOEIC スコアの上限について議論する。

笠原（2017）が指摘しているように、本学部の学生が 6-7 か月から 1 年の、留学という特別な環境と英語力獲得のプロセスをとおして身につけることのできる、英語力としての TOEIC 平均値の上限のようなものがあるのではないかと感じている。もちろん、個別には個人差として、それぞれが獲得する英語力に差はあると言えるが、各留学先あるいは本プログラムに参加する学生全体の平均として、TOEIC IP の特定の点数幅の中に収まるのではないかとと思われるところがある。

この点に関する統計的分析を加えた精緻な議論は別の機会に譲るが、このような仮説が立てられる論拠の 1 つとして、毎年、本留学プログラム説明会用に作成しているグラフを以下に示しておきたい（Figure 1. 参照）。

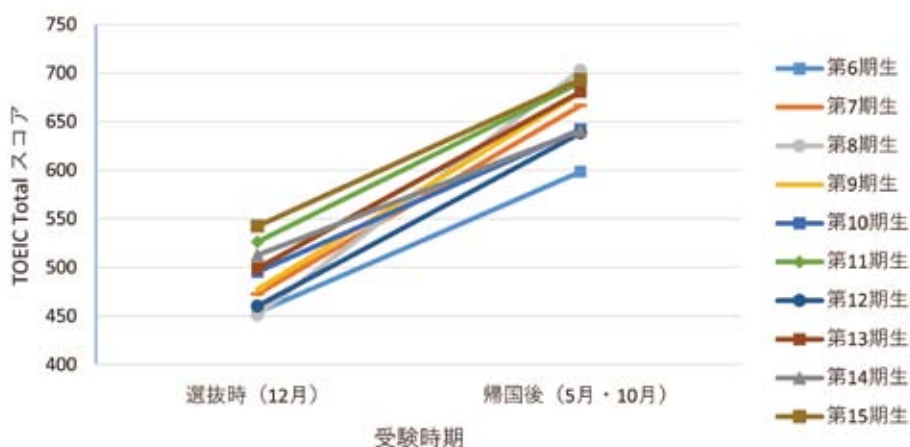


Figure 1. TOEIC IP Total スコアに見られるスコアの変化 <sup>11)</sup>

同様の傾きを描いて右肩上がりに得点が伸びていることがわかる。もちろん、その際、起点となる選抜時の TOEIC IP のスコア次第で、到達点となる帰国後の TOEIC IP のスコアが異なってくることは言うまでもない。しかし、ある一定の傾きを持って、一定の得点幅の

中に収まっていることは明らかである。また、起点により到達点のスコアが異なるという観点から見るのであれば、選抜時から帰国後に見られる TOEIC IP の Total スコアの伸び幅の平均として、本学部の学生の場合、6-7 か月から 1 年の留学で伸ばすことのできる TOEIC IP の Total スコアに上限があるのではないかと考えられるのである。ただ、これは個々人のレベルでの話ではなく、本留学プログラムに参加する学生全体の平均値という観点からのものである。

笠原 (2017, 2016) を見ると、第 14 期生の伸長得点は Listening が 64.58 点、Reading が 68.96 点、Total が 133.54 点となっている。同様に、第 13 期生の場合は、Listening が 79.00 点、Reading が 102.60 点、Total が 181.60 となっている。実数値での伸長得点ではバラつきが見受けられる。また、第 14 期生・第 13 期生の TOEIC IP の実数値での帰国後の到達スコアは、第 14 期生が Listening 366.04 点、Reading 273.13 点、Total 639.17 点；第 13 期生は Listening 370.20 点、Reading 310.40 点、Total 680.60 点となっており、こちらもバラつきが見られる。実数値だけでの分析ではここまでが限界と言えよう。最終的には、統計的な精緻な分析が待たれるところである。

## おわりに

本稿の目的は、学部留学プログラムとして実施している中期留学(英語圏)の第 15 期生の選考時から帰国後に見られる英語力の変化を分析することにより、そこから見える中期留学(英語圏)経験者が獲得した英語力と、学生たちの英語力の弱点を明らかにすることであった。

まず、選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目で示されたスコアを分析したところ、第 15 期生の英語力はたしかに向上していることが明らかになった。第 15 期生に関しては、選抜時において相当高い TOEIC IP のスコア (Listening 319.00 点, Reading 223.33 点, Total 542.33 点) を示しており、ある程度、英語の基礎力が身につけている状態で留学に送り出していることがわかった。また、帰国後に受験した TOEIC IP においてもたいへん高いスコア (Listening 395.86 点, Reading 297.24 点, Total 693.10 点) を獲得していた。両者間に統計的にも差があるのかを検証するため、 $t$  検定を実施したところ、両者の間に有意差が確認された (Listening :  $t = 8.95$ ,  $df = 28$ ,  $p < .001$ ; Reading :  $t = 9.86$ ,  $df = 28$ ,  $p < .001$ ; Total :  $t = 11.31$ ,  $df = 28$ ,  $p < .001$ )。第 15 期生の英語力は確実に伸びていることが明らかになった。

次に、第 15 期生の選抜時と帰国後の TOEIC IP の各項目間に見られる相関を分析したところ、帰国後の Listening と比較的強い有意な正の相関が示されたのは選抜時の Listening と Total であった。つまり、選抜時に TOEIC IP の Total で高得点であった者は Listening で高得点を取っている傾向が強く、そうした者は帰国後の Listening においても高得点を獲得する傾向にあることがわかった。帰国後の Reading と強い有意な相関が示されたのは選抜時の Total であった。ここから、選抜時に Total スコアで高得点であった者は、6-7 か月から 1 年の留学という特別な環境と言語獲得のプロセスをつうじて、Reading の力が伸びている傾向があることがわかった。

3点目として、留学先により身につく英語力にちがいはあるのかを検証するために、TOEIC IPの各項目のスコアに分散分析(ANOVA)を実施した。その結果、第15期生の場合、各留学先グループの英語力に有意な差は確認されなかった、Listening :  $F(5, 24) = .32$ ,  $p = .897$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .062$ ; Reading :  $F(5, 24) = 18$ ,  $p = .968$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .036$ ; Total :  $F(5, 24) = .21$ ,  $p = .956$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .042$ 。つまり、どの留学先に行っても同程度の英語力を身につけられる環境やプログラムであることがわかった。

最後に、留学先により英語の伸び率(得点の伸長)に差異はないのかを検証するために、各留学先グループの選抜時と帰国後のTOEIC IPの各項目のスコア差に対して分散分析(ANOVA)を実施した。その結果、第15期生の場合、各留学先グループ間の英語力の伸長に有意な差は確認されなかった、Listening :  $F(5, 23) = .57$ ,  $p = .723$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .110$ ; Reading :  $F(5, 23) = 1.42$ ,  $p = .755$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .235$ ; Total :  $F(5, 23) = .91$ ,  $p = .493$ , *n.s.*,  $\eta^2 = .493$ 。つまり、どの留学先に行っても同程度の英語力の伸びが期待できるということがわかった。

本稿では、以上の4つの観点から分析を行い、第15期生の客観的な英語力と当該の学生たちの英語力の弱点、本留学プログラムから獲得できる英語力の上限の可能性について議論してきた。前出の4点からの分析を踏まえ、これらの3点について議論・検討した結果、第15期生の英語力は選抜時においても、帰国後においても、社会人データと比較して相当高いものがあり、特にListeningの力が大きく伸びたことは特筆すべき点であった。しかし、Listeningという言語活動に関しては、現地で生活することにより24時間、常にその環境の中に身を置くことで、半ば自然に耳が鍛えられていく技能であるとも言える。まさに「習うより慣れろ」に当てはまる言語技能である。一方、Readingの伸びがListeningの伸びに比べると低調である点も顕著であり、本稿では学生たち英語力の弱点として指摘した。ただ、こうした傾向は第15期生に限ったことではなく、笠原(2008, 2011, 2015, 2017)においても同様に見られる傾向であった。つまり、本学部の学生が、留学という特別な環境と英語力獲得のプロセスにおいて、もっと鍛錬しなければならない技能はReadingの力をつけることではないかと提言した。ただ、これはSpeakingやWritingに関しては十分な力がつけているということではない。本留学プログラムで英語力測定の基準として用いているものがTOEIC L&Rであるため、ListeningとReadingの二つの技能を見比べた場合、Listeningに比べReadingにはまだ伸びしろが残っているということである。Readingという言語機能はListeningとは異なり、文字・活字を読むという活動に入り込まなければならないため、Listeningから比べるとはるかに積極的・能動的な側面が必要である。そのため、Readingの力をつけるには自ら積極的に文字・活字を読み進めていくことが求められる。そのため、そうした姿勢や習慣が身についているか否かが素地として大きいと考える。日本語で書籍を読んだり、活字を追いかけていたりすることに慣れている者や好きな者は、これが英語であっても同様に積極的・能動的に文字・活字を読み進めることができ、Readingの力としてTOEICのスコアに反映されてくるのではないかと考える。

最後に、本稿の中で提起した点であるが、今後の研究課題として6-7か月から1年とい

う留学期間において、各期のグループ全体の平均を見た場合、TOEIC のスコア、もしくは伸長得点、あるいは伸び率などにその上限や変動幅に一般化できる法則性やルール性があるのではないかと考えた。同様の指摘は、笠原（2017）においてもなされている。本稿で、その論拠として取り上げたのは、第6期生から第15期生までの選抜時（12月）と帰国後（5月・10月）の TOEIC IP の平均スコアの伸びを示したグラフ（Figure 1. 参照）であった。各期生ともすべて同様の、非常によく似た右肩上がりの傾きを示したグラフとなっていた。しかし、この点を検証するには精緻な統計的分析を行う必要があるため、今後の研究課題としてここに記しておきたい。

### 引用文献

- 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会（2017年6月）TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2017——2016年度受験者数と平均スコア——
- 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会（2017年7月）2017年度 新入社員 TOEIC® Listening & Reading 最新データ
- 岩淵千明編著 浦光博・石井滋・西田公昭・神山貴弥（1999）あなたもできるデータの処理と理解 福村出版
- 笠原正秀（2008）中期留学プログラムの目指す英語力——第5期生の選抜時と帰国後の TOEIC の結果から—— 2006年度 相山女学園大学 中期留学報告書 pp.62-70. 相山女学園大学 国際コミュニケーション学部
- 笠原正秀（2011）2010年度 中期留学第9期生の選抜時と帰国後の英語力の変化 2010年度 相山女学園大学 中期留学報告書 pp.54-65. 相山女学園大学 国際コミュニケーション学部
- 笠原正秀（2015）2014年度 中期留学第13期生の選抜時と帰国後の英語力分析 2014年度 相山女学園大学 中期留学報告書 pp.54-65. 相山女学園大学 国際コミュニケーション学部
- 笠原正秀（2017）2015年度 中期留学第14期生の選抜時と帰国後の英語力分析 2015年度 相山女学園大学 中期留学報告書 pp.61-71. 相山女学園大学 国際コミュニケーション学部

### 注

- 1）本稿は、これまで『中期留学報告書』に掲載していた中期留学から帰国した学生の英語力分析に代わるものである。そのため、第15期生の英語力の伸長報告の側面と学生たちが約半年もしくは1年の留学をつうじて獲得してきた英語力と、英語力としてまだ伸びしろのある言語運用能力の領域は何であるかを分析および議論する論文の両側面を兼ね備えたものである。
- 2）本留学プログラムの一次選考で用いている TOEIC IP は、TOEIC L&R である。
- 3）本稿で言う「英語力」とは、前出のとおり、TOEIC L&R のスコアに基づくものである。そのため、Listening と Reading の技能であり、Speaking や writing の二技能について言及するものではない。
- 4）アメリカ2大学、イギリス1大学、オーストラリア1大学、カナダ1大学、ニュージーランド1大学である。
- 5）相関係数とはピアソン積率相関係数（ $r$ ）を指す。
- 6）相関の程度を示す日本語表現および該当する相関係数の適用範囲の基準は、岩淵 et al.（1999）に従った。
- 7）留学先校別の度数（ $n$ ）は、留学先校が特定されることを考慮し、掲載せず。
- 8）留学先校別の度数（ $n$ ）は、留学先校が特定されることを考慮し、掲載せず。
- 9）ここで言う「レベル」とは、「TOEIC L&R でのスコア的に」という見解である。
- 10）留学先校別の度数（ $n$ ）は、留学先校が特定されることを考慮し、掲載せず。
- 11）中期留学の第1期生から第5期生までは、その選抜に TOEFL ITP を用いてきた。そのため、Figure 1. には第6期生以降からのデータが示されている。第6期生から選抜時と帰国後の双方とも、英語力の伸長を測定するのに、その基準として TOEIC IP を用いるようになった。第5期生の場合は、出発時は TOEFL ITP を用い、帰国後は TOEIC IP を用いた。そのため、それぞれの換算表を用いて分析を行った（cf. 笠原, 2008）。